

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 166, 2014

VIEW 展望

アニメーション研究の現状と課題／桑原圭裕…2

INFORMATION 学会組織活動報告

総務委員会…3 研究企画委員会…14 支部・研究会だより 関西支部…3
中部支部…4-5 ショートフィルム研究会…5-7 東部支部…7 ヴィデオアート
研究会…7-8 アナログメディア研究会…8-10 映像心理学研究会…10 アニメー
ション研究会…11 映像テキスト分析研究会…11 映像理論研究会…11

REPORT 報告

関西支部第70回研究会「メディアのスピリチュアルな役割について—日本と韓国
における『ハイジ』—」／朴紀吟…3 東部支部第33回映画文献資料研究会「映画監督・
春原政久のフィルモグラフィ―作成について」／田島良一…12-13

FORUM フォーラム

第5回（平成26年度）日本学術振興会育志賞受賞候補者推薦要項…13-14

FROM THE EDITORS

編集後記…14

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第166号」2014年4月1日発行
発行人：豊原正智 編集担当／総務委員会：古賀太（委員長）・遠藤賢治・伏木啓・
末永航・石坂健治・小出正志・仲本賢

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp

<http://jasias.jp/>



日本映像学会

アニメーション研究の現状と課題

桑原 圭裕

3月14日から3日間、大阪中之島にある国立国際美術館で第7回中之島映像劇場が開催された。今回は「日本の漫画映画の誕生と発展 草創期～1946年—東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品を中心に—」をテーマとし、戦前・戦中の日本アニメーションを代表する作者達の作品が全て35mmフィルムで上映されるという貴重な機会であった。最初のプログラムでは、松本夏樹氏所蔵の日本に現存する最古のアニメーションとされる数秒の3本のフィルムが、手回し式の映写機で上映された。その中の一本は海外で家庭用の「玩具映画」として制作されたもので、ほとんど動きのない映像に面白味がなかったのか、おそらく子供とおもわれる当時の所有者によってフィルムに直接文字や線で落書きがされていた。それは日本アニメーションがアマチュアの手によって動画としての変化や動きを求めたことから始まったことを意味していた。日本アニメーション史においてとかく戦前の作品はディズニーを筆頭とした海外作品と比べられて冷遇されることがある。しかし、当時を代表する山本早苗や大藤信郎、政岡憲三、瀬尾光世などの作品には技術と内容の両面において、それぞれが苦悩の末に独自の発展を重ねていたことがしっかりとみとれ、それらが今日のアニメの繁栄の確かな礎となっているように感じた。

この上映会には年輩のご夫婦や子供を連れた親子などの姿も多く見られた。海外からの注目だけではなく国内の幅広い年齢層からもアニメーションへの関心が高いことは、同時にアニメーション研究の増加と発展にも連動している。昨年、日本アニメーション学会西日本支部が設立されて、関西地域を中心に活発な研究会が行われている。渡辺泰先生の世界アニメーション史講座や高橋良輔監督による作品創作講話、そして神戸映画資料館への見学会など、関西地域の特色を活かした企画が重ねられているが、あわせてアニメーション研究の難しさや課題もより鮮明となってきた。そこで以下にそのいくつかを列挙することで、あくまで私的な考えではあるが、アニメーション研究の現状と展開の一端を示してみたい。

まずは「アニメーション」の定義である。広義の観点として「実写映画」と「アニメーション映画」のようにアニメーションを映像制作の一つの技法とみるか、あるいは「映画」と「アニメ」のように映像作品の一つのジャンルとしてみるかの違いだけでも、「アニメーション」の意味範囲は大きく変わる。狭義の観点として最新の日本アニメーション史研究において、「アニメーション」という言葉が使用されはじめた時期と経緯やそれまで一般的だった「漫画映画」との違いを精査する研究もみられる。国際的にみれば、animationとanimeにも単なる省略語としてではない個別の意味の違いもうまれてくる。このような「アニメーション」の定義や意味はまだ変化の途中にあり、研究の「時と場合」によって使い分ける必要があるだろう。

次に、個人制作と集団制作の違いにより、作品や作品中の表現の帰属先を明確にすることの認識とその難しさが挙げられる。近年のアニメーション制作において、コンピュータの発達により個人で制作される作品が増えてきているのは確かだが、基本的には集団制作である場合がほとんどだろう。その際、監督の指示や絵コンテをもとに原画や動画を担当する多くのアニメーターによって大量のコマが描かれるのだが、時にはあるアニメーターの独創によって監督の意図とは異なった作画がなされ、それが採用されることもある。映画でいえば、役者の優れた即興演技を役者の力とみるか監督の力とみるかの違いに似ているかもしれない。アニメーションの場合、ある表現が監督のものであるかアニメーターのものであるかを峻別するだけでなく、後者の場合どのアニメーターが描いたのかを特定することこそがとて難しい。

また、「日本のアニメ」が国際的な躍進を続ける理由は、明らかに「日本のアニメ」と「海外のアニメ」に何かしらの違いがあるからだろう。では何が「日本的」なのだろうか、ということをも根本的に考えれば、映画やアニメに限らず日本の伝統芸能や文化の大半が、その起源を海外の特に中国やインドに見出すことになるのではないかと。当然、映画やアニメは海外で発明されたものであり、たとえ日本で制作されたアニメ作品であっても、国際化が浸透した今日では、制作の一部を海外のスタジオに外注することもあれば、外国籍のスタッフが制作者として加わることもあり、ましてや監督やアニメーターの個人的な海外作品の影響を考えると、もはやナショナルリズムの観点自体がナンセンスともいえる。だからといって、海外と日本のアニメーションの違いを無視することもできない。重要なのは、それらの何が日本的であるかというより、どのように日本的であるかを考えることだとも思う。

最後に、アニメーション研究はアニメ作品やその中の表現だけに固執するのではなく、他の芸術分野との比較研究も必要だろう。歴史的にみればアニメーションと隣接する映画は、当然同じ発達経緯がみられる。また、今日のアニメとマンガの関係も切り離して考えることはできないだろう。ある先生から「映画で新しいとされたことのほとんどが、その前に演劇の世界で考えられている」と教えられたように、確かに視野を広げてみると、映像の発展は演劇のみならず、音楽や美術などの先行する他の芸術分野とも似た歴史的経緯と芸術論の変遷をたどっているようにみとれる。安易に考えれば、それは映画やアニメーションが他領域の要素や素材を混交させた芸術であるから自明のことだといってしまえばそれまでののだが、アニメーション固有の表現あるいはアニメーションらしさを追求するためには、やはり他分野との関連を丁寧にみていくことが必要であり、そこからアニメーション研究の新たな展開も可能であろう。

(くわばら よしひろ／関西学院大学)

総務委員会

古賀 太

2年前の役員選挙では、70歳以上や役員在任12期以上の会員に役員再任を辞退する権利を与えることで、役員若返りを図りました。今回の選挙では、経費節減及び理事会や各委員会会議のスピード化のために、役員人数を減らすと同時に各支部最低2名以上にするという選挙規定が先日の理事会で承認されました。具体的には30人に1人から40名に1人にする事で、東部は16人が12人に、開催は8人が6人に減ります。中部は2名のままで、西部は2名に増えます。さらに会長指名の理事は、会員の男女比を反映させる形で選ぶということも、提言として認められました。

昨年の全国大会から、大会参加費を5000円から3000円に値下げしました。またその総会で、今年度から学生の学会入会金を免除可とする事も認められました。また研究費の公募も始まりました。これらは会報の電子化を始めとした予算削減措置から生まれました。

これらの改革は、すべての会員にとってメリットのある学会活動を推進するためのものです。そのためにはまず投票率を上げることが、さらにみなさんの意見を反映させる理事会につながります。前回は24.7%、前々回19.4%という極めて低率の投票率でした。今回はぜひとも前回を上回る投票率にすべく、くれぐれも棄権をなさらないようお願い申し上げます。

以上

(こがふとし／総務委員長、日本大学芸術学部)

支部・研究会だより

関西支部

大橋 勝

関西支部では富田美香会員のお世話により、下記の通り関西支部第71回研究会を開催致しました。

日時：平成26年3月1日(土) 午後2時より

会場：立命館大学映像学部 松竹スタジオ2F 教室

研究発表1：物語の幻影に抗して - 小津安二郎の作品における「話法の形成」について -

発表者：京都造形芸術大学大学院・学術研究センター特別研究員 金東薫氏

研究発表2：大阪万博論争からみる『家族』(70、山田洋次)と『少年』(69、大島渚)の呼応性

発表者：立命館大学映像学部 富田美香会員

会員の発表は自らの映像制作の体験を出発点に、小津安二郎の作品の変遷と劇映画の確立過程を照合させながら、その独自性を検証するというユニークな内容でした。小津映画の具体的な演出を挙げながら、劇映画のモードに順応、抵抗していく姿勢に、制作者としての実感を踏まえながら考察が行われました。

富田会員の発表は、大阪万博(日本万国博覧会)について、関わった映画関係者、芸術家と当時の批評や発言をつぶさに検証し、あらためて振り返るものでした。その上で、万博を批判的に扱った『家族』(1970、山田洋次)と類似した構造を持つ『少年』(1969、大島渚)を比較し、日本映画において万博がどのように捉えられていたのかを考察しています。



両研究とも活発な質疑応答が交わされ、有意義な議論を持つことができました。

研究会終了後には富田会員の案内で、特別に松竹スタジオのオープンセットを見学させていただき、貴重で楽しい時間を過ごしました。

次回は5月10日(土)に神戸芸術工科大学にて第72回研究会を、12月に大阪芸術大学にて第73回研究会と関西支部総会を開催する予定です。また第34回を迎えます夏期映画ゼミナールは9月5日(金)、6日(土)、7日(日)に開催する予定です。今年度は会場を京都府立ゼミナールハウスから、京都文化博物館に会場を移して行きます。テーマ、上映作品、参加方法等詳しい内容が決まり次第、お知らせいたします。

(おおはしまさる／関西支部担当常任理事、大阪芸術大学)

REPORT

報告

メディアのスピリチュアルな役割について—日本と韓国における『ハイジ』—

朴 紀略

本発表は、日本と韓国における『ハイジ』を、メディアの変容という観点から調べ、その中で、アニメーションの『アルプスの少女ハイジ』(1974年)の役割を考察したものである。

『ハイジ』(1880～1881年)は、スイスの作家ヨハンナ・シュピリの小説であり、実写映画やアニメーションなど、様々なメディアに変容されてきた。

日本では、シュピリの『ハイジ』が1920年以来、数多い翻訳が出ている。著名な翻訳者の輩出や作家たちの翻訳への参加などから、日本での『ハイジ』に対する文学的な関心の高さが読み取れる。アニメーション『アルプスの少女ハイジ』は、シュピリの『ハイジ』を原作として制作され、1974年テレビ放映された。漫画や絵本やCMなど、シュピリの『ハイジ』がアニメーション化されたことによって、ビジュアルイメージの普及を煽った側面もある。日本でのシュピリの『ハイジ』の変容には熱狂ともいえる反応があった。

一方、韓国でシュピリの『ハイジ』が翻訳されたのは、1959年であり、2003年になって、ピリオンソという出版社からドイツ語からの完訳が出た。韓国でもアニメーション『アルプスの少女ハイジ』が同じタイトルで、1976年テレビで放映された。韓国では、アニメーションが放映されてから、シュピリの『ハイジ』が認知されるようになったと言っても過言ではない。最近、『ハイジ』の翻訳の大概は、子供用あるいは学生用の英語教材や論述のための教材として出版されている。表紙の例をみると、ハイジキャラクターの表現は多様化されている。

アニメーション『アルプスの少女ハイジ』とシュピリの『ハイジ』は、その相違点についてしばしば取り上げられてきた。まず、アニメーションでは原作より自然への憧れが強調されたということである。そのため、一部の設定が変更されたり新しく創造されたりした。もうひとつの差異は宗教性についてである。キリスト教文化との距離をおくことで、教会に馴染まない日本の観客を考慮した変更を試みたといえる。ところで、クララが歩けるようになったのはハイジの信仰に基づいた善意だったように、アニメーションでは、その原作の精神的側面が彼女のパーソナリティに生かされているとみることができよう。このように、メディア間、類似性(原作の精神を継承すること)を伴いつつ一定の差異(設定上の変更)を創造するという相互関連性がメディア変容にエネルギーを与えているといえる。

メディア間の相互関連性という点から、『ハイジ』の変容は、多様化されたメディア同士、相互の疎通を図ること、相互の価値を見直すことの重要性を考えさせ、それが文化をこえた各エリアで、観客の心情に伝わり、また行動をおこすというスピリチュアルなエネルギーを創造することにつながることを示唆する。

(ばくきりょん／韓国中央大学先端映像大学院非常勤講師)

支部・研究会だより 中部支部

和田伸一郎

2014年2月13日に2013年度中部支部第3回研究会(中京大学名古屋キャンパスにて、13時30分から18時30分まで)を以下のスケジュールで開催した。

13:30-15:00 第一部 特別企画トークセッション
15:10-16:00 第二部 研究発表
16:10-18:30 第三部 学生作品プレゼンテーション
18:30~ 懇親会

詳細は以下の通りである。

◎第一部 特別企画トークセッション「幸村真佐男の情報と芸術」
メディア・アートのパイオニアである幸村真佐男氏の作品をめぐって、ディスカッションを行った。
パネラー：幸村真佐男(中京大学)＋水野勝仁(甲南女子大学)＋茂登山清文(名古屋大学) / 司会進行：和田伸一郎(中部大学)

◎第二部 研究発表
「映像としての Google Maps」水野雄太会員(情報科学芸術大学院大学修士課程)

要旨：
「イメージの氾濫状態」と言われる今日の社会の中で、私たちは映像をどのように見ているのだろうか。日常生活の便利なツールとして広く使用される Google Maps の衛星写真やストリートビューの映像アーカイブは、その膨大な量において現代の映像環境を考察する上で看過することのできない存在である。現代のアーティストは、このような遍在的・網羅的な映像のなかに、現代を表象する「風景」を見出している。

Google Maps の映像を用いた作品の分析を通じて、今までの記録的な映像とは異なる性質をもった Google Maps の性格を明らかにする。

「過去の展覧会の仮想的なオンライン体験」稲垣拓也会員(名古屋大学大学院博士前期課程)、茂登山清文会員

要旨：
情報技術の発展により、1990年代から美術館、博物館において、収蔵品のデジタルアーカイブ化が急速に進み、アーカイブの収集と利用の面でデジタル技術を用いた試みがなされてきた。このような背景の中、本研究では、アーカイブの利用の面に注目し、AR技術を用いて展覧会アーカイブをオンライン上で体験するシステムを開発した。

このシステムの目的は、展覧会や作品についての多様な理解や新たな気づきをもたらすことである。システムは、ある展示空間を想定し、カメラのついたデジタルデバイスを利用者が壁面に向けることにより、過去にそこでおこなわれた展覧会の風景を、アーカイブ化された画像から呼び出しデバイスのスクリーン上に表示するものである。システムの実証のため、2013/11/25 - 29の期間、名古屋大学教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」において「clas」AR-chive展を企画し、実験をおこなった。「clas」AR-chive展では、アート作品を実際の会場に展示し、その作品をARマーカーとして利用し、システムを機能させた。また、ARで表示させる過去の展覧会ごとに計7個のiOSアプリを制作した。そしてシステムの利用者に対してアンケート調査を実施し、46の回答を得て、それをもとに考察を加えた。アンケートでは、約5割の回答者から、システムを利用することによってなにか発見や気づきがあったとの結果が得られた。そして、記述回答の中では、被験者にとって普段の自分の鑑賞行為自体をかえりみるという、展覧会の多様な見方へ繋がる可能性が見られる回答が得られた。

◎第三部 学生作品プレゼンテーション
参加校

- 愛知淑徳大学
- 静岡産業大学
- 情報科学芸術大学院大学 (IAMAS)

- 椋山女学園大学
- 中京大学
- 中部大学
- 名古屋学芸大学

◎作品詳細

●愛知淑徳大学

joshikousei|web インスタレーション | 岩堤彩乃 (メディアプロデュース学部3年)

he is|アニメーション|2min|小申朋子(メディアプロデュース学部3年)
children/wars|アニメーション|2min|丹羽彩乃(メディアプロデュース学部3年)

植物のひと|映像|1h10min(本編)|本多結衣(メディアプロデュース学部4年) ※出力:PC

●静岡産業大学

カナブンと自分|映像|6m57s|遠藤 崇・望月勇昂・柴田祥吾(情報デザイン学科3年)

Viela|映像|2m22s|塚本純平(情報デザイン学科3年)
アシナシ|アニメーション|6m30s|山田将大(情報デザイン学科3年)
※出力:DVD, PC

●椋山女学園大学

野菜とイチゴのダンス、クリスマスカード|ストップモーション / スクラッチプログラミング作品 | 椋山女学園大学付属小学校アフタースクール「デジタルクリエイション」受講生及び、文化情報学科4年生・3年生有志によるボランティア(森・粟根・上原・大嶋・大野・渡邊・山下) 日々のリズム♪|映像|3m48s|川本千紘(文化情報学科メディア情報専攻4年) ※出力:PC, DVD

●中京大学

variation|映像|1m40s|星和貴(メディア工学科 曾我部ゼミ)
影の軌跡|インスタレーション|浅井翔太(メディア工学科 大泉研究室)
diffusion cloud chamber|インスタレーション|加藤明洋(メディア工学科 上芝研究室) ※出力:PC

●名古屋学芸大学

少年たちが集まるとき|映像インスタレーション(シングルモニターバージョン)|10m30s|菅森謙太(映像メディア学科4年)
実験1|メディアインスタレーション|立松亜也奈(大学院メディア造形研究科1年)
※出力:PC

●情報科学芸術大学院大学 (IAMAS)

TODAY FUKUSHIMA 0819-26|映像|11m|伊藤 遼(メディア表現研究科2年) ※出力:Blu-ray

●中部大学

Dead of Familia|映像|5m20s|苅安 蘭 服部智仁(人文学部コミュニケーション学科) ※出力:DVD

ショートフィルム研究会

林 緑子

長年、メディア・アートの第一線で活躍され、また中部支部にもご尽力されてきた中京大学の幸村真佐男先生の退官記念イベントを、特別企画トークセッション「幸村真佐男の情報と芸術」と題して行った。



デジタル化はあたかも映像を「無限」に近づけようとしているかに見えるが、実際には、理念（アイデア）としての画像は有限であるという逆説的なテーゼなど、ご自身の独自の哲学を、メディア・アーティストのパイオニア的存在として語っていただいた。Flickr への膨大な数の画像投稿によるライフログから、ニーチェの永劫回帰にまで話題は多岐にわたり、尽きないトークは四〇名あまりの来場者からの複数の質問によって盛況のうちに幕を閉じた。

第二部は、水野雄太会員と稲垣拓也会員から新しい分野についての研究発表が行われ、今後の研究の可能性を感じることができた。

最後に第三部として、東海地区の大学七校から学生作品プレゼンテーションへの参加があった。映像作品からアニメーション作品、インスタレーション作品と例年通り幅広いジャンルから発表が行われた。



盛りだくさんのスケジュールとなってしまったため、質疑応答などの時間をとることができなかったことを反省とし、来年度は何らかの対応をとりたい。

この場を借りて、ご協力いただいた先生がた、参加してくれた大学院生、学生に感謝申し上げます。また、幸村真佐男先生にはこれまでの中部支部への長きにわたるご尽力を心よりお礼申し上げます。

来年度は、2014年9月に中部支部第一回研究会を静岡産業大学にて開催予定としている。ゲストは、「情報アーキテクト」として最近注目を浴びている渡邊英徳氏（首都大学東京准教授）を予定している。

以上

（わだ しんいちろう／中部支部担当常任理事、中部大学人文学部）

2013年度研究会活動助成の交付を受けて、ショートフィルム研究会では下記の内容・日時で企画を開催いたしましたので、ここにご報告いたします。また、2015年3月末までの活動として、以下4件の開催を計画しています。

開催終了企画の事後報告

第3回活動（現在、継続中）

会期名 名古屋フィルムミーティング2014（第4回）告知・作品募集活動

期日 2014年1月頃～

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

共催 名古屋フィルムミーティング実行委員会

内容 名刺と、告知・作品募集チラシを制作し、周知活動を行う

主旨 東海地区での学生と一般の映像制作を盛り上げる交流の場として、公募作品による上映会を開催する。

公式HP http://filmm.info/nfm_main/

大学や教育機関の卒業制作展などで学生の方に、作品募集の旨を口頭にて周知活動を開始している。名刺を制作し、現在チラシとパンフレットを制作中。

第4回活動

会期名 平成24年度文化庁芸術振興費補助金 助成対象作品（短編アニメーション部門）紹介企画「アニメーションと絵本とお話しと。」

期日 2014年2月22日（土）15:00～16:30

2014年2月23日（日）15:00～16:30

参加費 無料（別途、要1ドリンク注文）

来場者数 36名

内容 作品上映とトークレクチャーを交互に行う

会場 シアターカフェ

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目32-24

マエノビル2階

主催 シアターカフェ

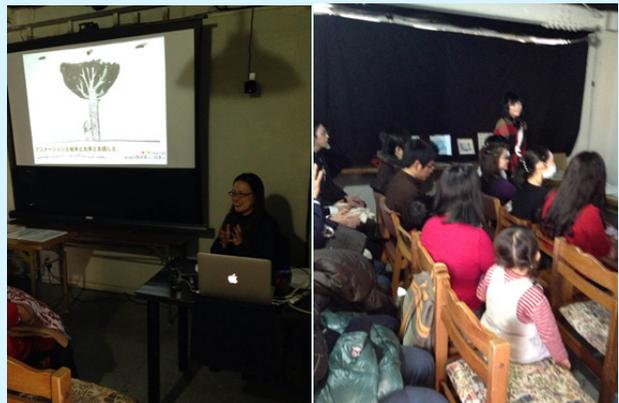
共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

協力 鳥居なつみ（2月23日トークゲスト）

吉村桜子（2月22日トークゲスト）

NHK プチプチ・アニメやみんなのうた、オリジナル作品などのアニメーション制作を行っている、アニメーション作家・三角芳子氏の、作品上映と制作についてのトークレクチャーを行った。

三角氏は、東京藝術大学美術学部工芸科でテキスタイルを学ぶなか、「ストリートオブ・クロコダイル」（プラザースクエイ監督/1986年）に衝撃を受け、アニメーションを独学で制作開始。卒業制作展に出品した、布を使用したアニメーション作品が、NHK スタッフの目に留まり、時代劇「次郎長背負い富士」のエンディング・アニメーションを作ることになる。そのプロデューサーの紹介でプチプチ・アニメを作ることになった。



上映①「王さまものがたり」(2007年/5分/NHK プチプチ・アニメ)

切り絵を主体としたミクストメディアのコマ撮りアニメーション作品。当時、デザイン制作会社に勤務していたが、アニメーション制作に集中するため会社を辞める。その頃、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻ができ入学した。在学中は、国内外のさまざまなタイプのアニメーション作品や作家に触れることができた。

上映②「Googuri Googuri」(2010年/8分22秒)

現実と夢の境がまだ曖昧な子供と、お祖父さんの話。中割りの手法がわからず、クレヨンを用いた描き送りの手法で、描いては消すことを繰り返して作画した。

上映③「MOSQUITONE」(2011年/8分30秒)

モスキートーンは未成年者にしか聞こえない1万7000ヘルツの高周波数のこと。社会のなかで子供の抱える問題と解決法について考察した作品。木炭を用いた描き送りの手法で制作した。

上映④「ある朝目がさめたら足が木になっていた。」(2013年/7分5秒)

ある精神疾患患者の手記に書かれた文章「私は木なのだ。木は森に還らなければならない。木は木だから。皆はわかってはくれない。もうすぐ水がなくなるから、葉は枯れ、私は死ななければならない」よりインスピレーションを受け制作した。平成24年度文化庁芸術振興費補助金を受け制作。現状、短編アニメーション作品は制作費を得ることが難しいが、助成金や支援を獲得していくことは重要。

また、クライアントワークとオリジナルワークの違いについてもお話いただいた。クライアントワークは、他人が観ておもしろいもの、作品に求められているものについて考え制作する。複数作品を同時進行で制作することが可能。オリジナルワークは自分自身に向けて作っている。現代社会や人間について、日々感じ考えていることを土台に構成している。日々気にかかった事柄についてメモを取っており、それが作品の元となる。4.5ヶ月程度の期間で、制作1本に絞って専念して作る。クライアントワークとオリジナルワークで、それぞれ制作時期が分かれている。上映とトークを通じ、国内で短編アニメーション作品を制作発表していくことについての実際面を知れる機会となった。

第5回活動

会期名 ひらのりょう「パラダイス」はじめてのトリップ 名古屋旅情編

期日 2014年3月15日(土)

15:00「パラダイス」上映(20分)

16:00 ひらのりょう氏トークレクチャー(60分)

17:30「パラダイス」上映(20分)

参加費 各回500円

来場者数 45名(延べ)

内容 作品上映、トークレクチャー

会場 シアターカフェ

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目32-24

マエノビル2階

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

協力 FOGHORN(株式会社ドリームミュージック)

マネージメント会社にアーティストとして所属し、ミュージックビデオやテレビの映像制作、オリジナル短編アニメーション作品制作を行う、ひらのりょう氏の最新作「パラダイス」上映と、本人によるトークレクチャーを行った。

新作「パラダイス」は、FOGHORN製作のもと、1年弱かけ制作された短編アニメーション作品。制作方法としては、気になった複数の事柄について調べ、それらを連想ゲームのようにつなげ全体を構成する。始めに作品の最初と最後を決め、入れ込む要素が集まったら構成や演出を決める。今回は、調べた要素の約2割を使って制作したとのこと。

例えば、メインキャラクターのひとつである歯は、歯医者の看板に描かれている歯のキャラクターから着想した。人体の一部を擬人化したこれらキャラクターは、一見かわいけれど奇妙な存在だと感じた。国内の歯医者の数は、コンビニエンスストアの1.6倍で、多くの歯科医院が様々な歯のオリジナル・キャラクターを作っている。それらを写真撮影し画像を集めた。また、東日本震災のとき被災地で活躍した歯科医師に感銘を受け、もっと歯について深く知りたかった。そして、調べて行くうちに、6500万年前のケラトプス科の歯が残っていることを知

り、歯の永続性に注目した。それらのイメージから、まずは数本の漫画を作成した。最初に、抜けた乳歯を屋根の上へ投げる風習に着目した。何十万人の日本の子供たちが乳歯を屋根の上に投げるイメージにぞっとし、屋根の上に乳歯が残り続けるというアイデアを思いつき、「俺と乳歯」を制作。二作品目は、歯に含まれるDNAや、歯は人体の中で一番硬いということから、自分の作品よりも永遠に残るだろう歯にSF的なイメージを持たせ、歯が惑星をめぐるタイムカプセルだったという漫画を描く。

三作品目では、ラブコメディが好きなので、歯のラブストーリーを描いた。彼氏と別れた女性の歯だけが、未来も残り続ける内容の、動く漫画を作り、株式会社ガイナックスのサイトトップで1週間表示された。他に使用した要素は、「振動」「戦争」「南洋幻想」など。こうした作業を経て、メモ書きや漫画から全体構成をまとめていった。

作品の実制作を行う前段階で、制作者が具体的にどのようにイメージを作り作品として構成していくのかが具体的にわかる機会となった。



開催予定の企画概要

第6回活動

会期名 林勇気映像展示+トークレクチャー
 線と記憶とてざわりについて(仮)

期日 2014年7月12日(土)~7月19日(土)

内容 上映+トークレクチャー

会場 シアターカフェ

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目32-24

マエノビル2階

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

主旨 1997年より映像作品の制作を始めた林勇気氏の展示上映とトークレクチャーを行う。林氏は、自身で撮影した写真データを、パソコンのソフトで編集し、アニメーションを制作してきた。デジタル感を残しつつも、手作業のあとを感じられるような作風で、現代社会におけるデジタルのあり方をあらわしている。また、短編アニメーション作品として、映画祭での上映もさかんに行ってきた。今回、林氏の制作と活動について、展示上映とトークレクチャーで紹介する。

■林勇気氏プロフィール

1976 京都生まれ

1997 映像の制作をはじめ

宝塚造形芸術大学講師 日本映像学会会員

【個展】

2009 neutron tokyo(東京)

2008 世田谷ものづくり学校 IID gallery(東京)

ギャラリー揺(京都)

2007 gallery neutron(京都) ※08、09にも開催

2004 ギャラリー三条(京都) ※05、06にも開催

【主な映画祭】

2008 Indie AniFest 光乱の交差点(韓国)

animation soup / HEP HALL(大阪)

2007 イメージフォーラムフェスティバル/新宿パークタワー(東京)、

北海道立近代美術館(北海道)、他

ASK? 映像祭 / art space kimura ASK?(東京)

2006 トロント・リアル・アジア国際映画祭(カナダ)

イメージフォーラムフェスティバル/新宿パークタワー(東京)、

愛知県芸術文化センター(愛知)、他

2004 ニッポン コネクション(ドイツ・フランクフルト)

バルセロナアジア映画祭(スペイン)

2003 ソウルビデオフェスティバル 林勇気プログラムで特集上映

(韓国)

- ソウルフリンジフェスティバル (韓国)
アジア・アメリカ国際映画祭 (アメリカ主要都市を巡回)
ナッシュビル国際映画祭 (アメリカ)
香港国際映画祭 (香港)
2002 高尾国際映画祭 (台湾)
バンクーバー国際映画祭 (カナダ)
イメージフォーラムフェスティバル / 新宿パークタワー (東京)、
横浜美術館 (神奈川)、他

【主な受賞】

- 2006 AMUSE ART JAM / 準グランプリ 受賞
トロント・リール・アジア国際映画祭 / Most Innovative Film
or Video Production Award 受賞
2002 イメージフォーラムフェスティバル / 審査員特別賞 受賞
1999 動楽映楽・アニメーション実験映像劇場 / 香山リカ賞 受賞

第7回活動

- 会期名 飯塚貴士監督による映像制作ワークショップ (仮)
期日 2014年夏以降で2日間 (土日祝)
内容 映像制作ワークショップ
参加費 1500円 (2日間 / 予定)
定員 10名 (予定)
会場 シアターカフェ
〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目 32-24
マエノビル 2階
主催 シアターカフェ
共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

フィギュアや人形、ミニチュアセット等を使用し、人形劇と特撮映画が合わさったような短編映画を制作している、飯塚貴士監督の映画制作ワークショップを開催する。屋内の様々な場所を使用し、人形主体の映像作品として、ストーリー構成から撮影までをグループで行う。アナログな手法による人形劇映画の制作方法を学ぶことを通じて、1本の短編映画ができるまでを体験してもらう。

■飯塚貴士氏プロフィール：

1985年生まれ。2008年、地元・牛久市でワッペンフィルムスタジオを立ち上げ、インディペンデント映画制作を行う。人形とミニチュアセット、昔ながらの特撮技法を用いた作風が特徴で、監督、脚本、撮影、美術、音楽、登場人物の声をほぼ一人で行っている。主な作品は「エンカウンターズ」「GREATROMANCE」など。

第8回活動

- 会期名 名古屋フィルムミーティング 2014
期日 2014年9月 (予定)
内容 上映、交流会
会場 未定
主催 日本映像学会ショートフィルム研究会
共催 名古屋フィルムミーティング実行委員会
主旨 東海地区での学生と一般の映像制作を盛り上げる交流の場として、公募作品による上映会を開催する。
公式HP http://filmm.info/nfm_main/

第9回活動

- 会期名 JJJOによる上映・公演+トークレクチャー (仮)
期日 2014年秋以降
内容 上映・公演、トークレクチャー
会場 シアターカフェ
〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目 32-24
マエノビル 2階
主催 シアターカフェ
共催 日本映像学会ショートフィルム研究会、
主旨 短編アニメーション作家・鋤柄真希子氏と、人形操者・坂東綾子氏による、上映・公演ユニット JJJOの公演とトークレクチャーを行う。

以上

(はやし みどりこ / ショートフィルム研究会代表)

支部・研究会だより

東部支部

奥野 邦利

東部支部報告と計画について

東部支部につきましては、昨年度までに、「映画文献資料研究会」「映像テキスト分析研究会」「映像理論研究会」「映像心理学研究会」「アニメーション研究会」「映像表現研究会・東部会」「クロスメディア研究会」「アナログメディア研究会」「ビデオアート研究会」の9つの支部所属の研究会が設置されました。研究企画委員会によって進められた制度変更が機能していることと実感しています。特に実作系の研究活動が活性化しており、会員諸氏の積極的な参加が望まれます。次回大会までには、東部支部幹事会を執り行い、支部研究会の活性化と共に、新たな東部支部の姿をお示しできるよう努めてまいります。前号でもお示ししましたが、支部活動費の運用については、以下のことをご確認ください。

(1) 東部支部における研究助成費使用規定について

東部支部研究助成費については、研究企画委員会にて検討され、理事会にて承認された新たな組織形成に準じながら運用して行くことが確認されました。組織形成については、総務委員会及び研究企画委員会の報告をご確認ください。いずれにせよ、東部支部の所属を希望して申請承認された研究会については、研究会代表に東部支部研究助成費使用規定を提示しますので、それに基づいて公平且つ有効に利用されることになります。

(2) 東部支部における運営費使用規定について

現在の東部支部の運営状況を鑑みると、運営費については無理に予算消化することなく、これを柔軟に使用し、残金は年度ごとに学会本部へ返金することで、学会全体の活動費として有効に利用されることを希望しています。なお東北、北海道地区への活動補助については、引き続き検討をしています。

以上

(おくのくにとし / 東部支部担当常任理事、日本大学芸術学部映画学科)

ビデオアート研究会

瀧 健太郎

ビデオアート研究会報告と計画について

近年、ビデオアートの研究は歴史的領域に入り、若手研究者を中心に興隆をみせてると言えるが、その一方で技術論、美学、文化史論などにジャンルが分断され、それぞれの分野でわずかに緻密とはいいたい先行研究があるにすぎない。そのような状況を鑑み、未来へ向けてビデオアートの若手研究の質的向上と、特にアーティストの制作や活動現場との密な関係を作るフィールドワークと、アカデミシャンたちの共同研究・交流による情報交換や切磋琢磨により、アカデミックな議論の水準を上げることを本研究会の目的とした。また研究会の参加を日本映像学会員に限定せず、学際的な場として様々なジャンルの研究者を交えて開催することとした。

計画では月1回の定例研究会、またはフィールドワークを開催する。本研究会は研究者のブラッシュアップを主目的とし、毎回1-2名の発表者を定めて、プレゼン発表とオープンな議論をおこなうこととした。フィールドワークを行なう回では、毎回作家の制作および活動、作品発表、あるいは企画運営の現場を訪れ、ビデオアートをめぐる実践的な技術、コンセプト・ビルディング、経済的活動などに直接触れる機会を

アナログメディア研究会

太田 曜

作り出す。また不定期でビデオアートをめぐる研究と実践の場の交錯による(諸問題の解決策の検討や)活性化を目指すという観点から講師を招き、レクチャー・シンポジウムなどを開催する。

2013年12月に構成員による立ち上げの会合を持った後、翌年1月に初回の研究会を行い、その内容をビデオアート研究の先行研究に焦点を絞ることに決定し、第一回の研究会では、「ロザリンド・クラウス『Video: The Aesthetics of Narcissism (ビデオ:ナルシシズムの美学)』を巡るビデオアート研究の分析」をテーマとした。クラウスは1976年の「OCTOBER」誌に、ヴィト・アコンチの「Centers」(1971)を挙げ、作者が20分間テレビ画面の中心を指差し続けるという行為から、ビデオを通じて作者自身を見つめる鏡として機能させ、ビデオとナルシシズムの交点を描きだした。しかし今回の研究会パネリストの間から、クラウスの検分方法に意見があり、画面に指を指すアコンチの制作現場を再検証したところ、アコンチ自身は画面を見ているのではなく、ビデオカメラを指差し続けている可能性が出てきた。つまりクラウスの論考の根幹となる「ビデオ=鏡;自身を見ること」という作品の技術・構造的に疑問が浮かび上がったのだ。今後はビデオアートの撮影の状況・構造を緻密に調査する必要性が改めて問われる機会を得ることとなった。

また研究にあたり「ビデオアート」あるいは「ビデオ」の語句の再定義の必要性が問われ、2000年代におけるビデオ性とは何かをいくつかの意味で用いるを継続的に話し合われることになった。

第二回の研究会は、折しも開催されていた恵比寿映像祭の上映プログラマーの碓井千鶴氏をお迎えし、「ビデオアート展示・映像祭のオーガナイズという視点から」のテーマの下、ビデオアート展示(どこからどこまでをその呼称に当てはまるかはさておき)の舞台裏や、映像祭参加の作家の取り組みにより深い関心を寄せつつ、ビデオアートを見せる現場についての実地調査・研究を行なった。

まだ現時点で予定されている第三回研究会では、前々回のクラウスのヴィト・アコンチ論を受ける形で、同じくアコンチを扱うイヴォンヌ・シュピールマン「機器、自己反省、パフォーマンス」(『ビデオ 再帰的メディア』より)におけるビデオアート研究の分析を行なう予定だ。2011年に邦訳されたシュピールマン『ビデオ』から同じくヴィト・アコンチの70年代の作品をいくつか扱っている章を抜き出し、研究会を行う。今後、研究会の成果発表と評価目標として、参加者によるビデオアート論の集成を何らかの形で編纂することを視野に入れている。またそれらを国内のみならず海外の研究機関との連携を図るため可能な限り翻訳してゆきたいと考えている。

N.J. パイクやW. フォステルらが1963年にテレビモニターを使ったアート作品の展示を行なったことをビデオアート創世とする場合、昨年2013年でビデオアート誕生から半世紀を迎えた。ビデオアートの今日的な位置づけと、その研究分野の深化が要請されるなか、もはやこれまでの研究方法を用いるという一筋縄ではいかず、学際的で機動力のある研究会の有り方を模索し、視覚芸術の将来性に繋げてゆきたい。

(ビデオアート研究会は映像学会メーリングリストを通じて告知しております。その他の研究会の開催・内容・資料などに関する問合せは、瀧健太郎 taki.kentarou@ebony.plala.or.jp まで)

(たき けんたろう/ビデオアート研究会代表)

アナログメディア研究会 活動報告

1) シンポジウム『映像アート作品のアーカイヴについて』

日時: 2014年1月18日(土) 14:00-16:30

会場: 阿佐ヶ谷美術専門学校5号館521教室

パネラー: とちぎあきら氏(国立近代美術館フィルムセンター・主任研究員/映画室長)

西村智弘会員(映像・現代美術批評/アナログメディア研究会)

進行: 末岡一郎会員(映像作家/阿佐ヶ谷美術専門学校講師/アナログメディア研究会)

とちぎあきら氏による映像資料を使ったレクチャーの後アナログメディア研究会 西村智弘会員とのシンポジウム。その後来場者を含めての質疑応答。



全体の記録は facebook ページ等にアップの予定。

2) アメリカの実験映画 2014

American Experimental Film Show Case 2014 最新実験映画上映とトーク

「Traces of Activities (カツドウのキセキ)」全作 16mm フィルム上映

日時: 2014年3月1日(土)

会場: 渋谷・UPLINK FACTORY

はたして『フィルム』の時代は終わったのか? 世界の状況はどうなのか?

まずはその一端を知るために。アメリカにおける『フィルム』で制作されている実験映画の現在を紹介する企画。N.Y. 在住のキュレーター・実験映画作家、西川智也氏にプログラミングを依頼、アメリカ/カナダの最新実験映画をすべて 16mm フィルムで上映。N.Y. と渋谷をインターネットでつないで、西川氏がライブでアフタートークに登場。

Skype トーク: 西川智也氏

聞き手: 太田曜会員(実験映画作家/アナログメディア研究会)



“このプログラムは「Traces of Activities (カツドウのキセキ)」と題し、様々な現象/事象を記録した作品で構成され、遠い過去と現在の繋がりや断絶をテーマに、フィルムという媒体の特徴、質感、撮影過程等に強い関心を持ち、フィルム作品を作り続けているアメリカ/カナダ在住の作家による最新実験映画を紹介します。”(西川智也)

上映作品



1. ライト・リズム #1-3
 (ユジン・ムン / 3分 / サイレント / カラー / USA / 2013年)
 Light Rhythm #1 - 3 by Youjin Moon
2. Brimstone のライン
 (クリス・ケネディ / 10分 / サウンド / カラー / カナダ / 2013年)
 Brimstone Line by Chris Kennedy
3. 構築 (ロバート・トッド / 12分 / サウンド / 白黒 / USA / 2012年)
 Construct by Robert Todd
4. 生物はドラムに合わせて動き出す
 (ジョナサン・シュウォーツ / 8分 / サウンド / カラー / USA・イスラエル / 2013年)
 animals moving to the sound of drums by Jonathan Schwartz

5. 光を舐める：バビロン河のほとりで：私はそれを黒にしたい
 (ソウル・レヴィン / 12.5分 / サイレント / カラー / USA / 2013年 / オリジナル・フィルム ; super8)
 Light Licks: By the Waters of Babylon: I WANT TO PAINT IT BLACK
 by Saul Levine
6. プリウム上を通り行く
 (フェーン・シルヴァ / 7分 / サイレント / 白黒 / USA / 2011年)
 Passage Upon the Plume by Fern Anderson 'The Spider' Silva
7. テオリア
 (ジョシュ・ワイズバック / 6分 / サウンド / 白黒 / カナダ・ギリシャ / 2014年)
 Theoria by Josh Weissbach
8. メイドイン・チャイナタウン
 (ジム・ジェニングス / 16ミリ / 6分 / サイレント / カラー / USA / 2005年)
 Made in Chinatown by Jim Greg Waylon Jennings

西川智也氏 プロフィール

ニューヨーク州立大学ビンガムトン校助教。2007年より映像キュレーターとして活動を始め、恵比寿映像祭、[+] (プラス)、アナーバー映画祭、ドレスデン短編映画祭、サンフランシスコ近代美術館、エコ・パーク・フィルムセンター等で上映プログラムを紹介。2008～10年までアメリカの実験映画配給組織「キャニオン・シネマ」の理事を務める。2010年にクアラランプール実験映画祭 (KLEX) を現地の作家らと設立し、2013年よりニューヨーク州ジョンソンシティで開催されている映像祭「TransientVisions」のキュレーターを務める。

www.tomonarinishikawa.com

US & Canadian Experimental Films Show Case 2014

アメリカの実験映画 2014
 Traces of Activities

2014年3月1日[土]
 18:30開場 / 19:00上映
 会場: UPLINK FACTORY
 東京都渋谷区宇田川町37-18 トンネル1階
 tel. 03-6825-5503
 入場料: 当日1800円 / 予約1500円 (共に1DRINK付)
 ご予約・詳細は会場HPにて <http://www.uplink.co.jp/>
 *上映後に西川智也氏によるアフタートークあり。

主催: 日本映像学会アナログメディア研究会
<https://www.facebook.com/analogmedia>
 協力: 西川智也NY州立大学ビンガムトン校教授
<http://www.tomonarinishikawa.com>

映像心理学研究会報告

横田 正夫

US & Canadian Experimental Films Show Case 2014
アメリカの実験映画2014
 「カツドウのキセキ」
 Traces of Activities

はたしてフィルムは終わったのか？世界の状況はどうなのか？

まずはその一端を知るために、アメリカにおける「フィルム」で制作された実験映画の状況を知りたいと企画されたのが【アメリカの実験映画2014】です。今回、NY在住のアーティスト・実験映画作家、西川智也氏にプロデュースを依頼、アメリカ・カナダの最新実験映画をコーディネートして頂きました。上映作品は全て16mmフィルムで上映、さらにNYと東京をインターネットで繋いで、西川智也氏がアフタートークまで登場します。(アナログメディア研究会)

このプログラムは「Traces of Activities (カツドウのキセキ)」と題し、様々な実験/事例を記録した作品で構成され、過去と現在の繋がりが断絶をテーマに、フィルムという媒体の特性、質感、撮影過程等に強い関心を持つ、フィルム制作を取り組む「アメリカ/カナダ在住の作家による最新実験映画を紹介する。(西川智也/映像作家・キュレーター)」

西川智也：ニューヨーク州立大学ビンガムトン校院教授。2007年より映像キュレーターとして活動を始め、現代映像制作（ビデオ/デジタル）、アーティスト映画、ドキュメンタリー映画、サウンドインスタレーション、パフォーマンス、ビデオアートなどで上映作品を多数制作。2008-10年までアメリカの映像制作会社「カウチ」の代表取締役として活動。2010年にアメリカン・フィルム・インスティテュート（AFI）の「フィルム・フェスティバル」で「フィルム・フェスティバル」のキュレーターとして活動。2012年に「フィルム・フェスティバル」のキュレーターとして活動。2013年に「フィルム・フェスティバル」のキュレーターとして活動。2014年に「フィルム・フェスティバル」のキュレーターとして活動。

2014年3月1日[土]
 18:30開場 / 19:00上映
 会場：UPLINK FACTORY
 入場料：当日1800円 / 予約1500円 (共に1DRINK付)
 ご予約・詳細は会場HPにて <http://www.uplink.co.jp/>

〒150-0042
 東京都渋谷区宇田町37-18
 ツツネビル1階
 TEL 03-6825-5503
 アクセス <http://www.uplink.co.jp/index.html>

主催：日本映像学会アナログメディア研究会
 事務局：奈良ヶ谷美術専門学校内 担当：末岡 智也氏 analoguemedia@nara-kaya.ac.jp
<https://www.facebook.com/analogmedia>
 協力：西川智也氏(州立大学ビンガムトン校院教授)

（全作16mmフィルム作品。＊上映作品が変更する場合があります）

平成 25 年第 2 回映像心理学研究会は、平成 25 年 12 月 14 日、日本大学文理学部 3 号館 3 階の 3510 教室で行われた。アニメーターの「動き」の作成と知覚心理学者の「動き」の知覚実験を通して、アニメーション現場と知覚研究者の交流を図り、動きの理解を深めることを目的とし、今回の発表者（ゲスト）に発表をお願いした。各発表の発表時間、発表要旨は以下の通りであった。

2:00-3:00

「アニメーションの動きについて」

深井利行氏（ブレインズ・ベース）

動きを創造する行為は、結果様々な手段によって時間の推移による状態の変化を現すこととなります。そして、なめらか（自然）な動きを創造するあるいはそのように認識させる為には、その中で起こる運動のズレ（時間差）を適切に現すことが重要になり、自然と運動曲線はより複雑になります。それらを、特に「フォロースルー」「セカンダリアクション」「ムービングホールド」という技法へ現場レベルではどのように結びつけているのか。

3:10-4:10

「提案～アニメーションとは「動きの造形」である」

森田宏幸氏（アニメーション作画・演出）

「動きの造形」とはどのようなものか？ 先行する研究を参照しつつ分かりやすく示します。その上で、日本アニメは本当に動いているのか？ 問題提起させていただき、その上で、アニメーションの作り手が認める「動き」について考え、「動きを作る技術」とは何か？その再定義を提案いたします。

4:20-5:20

「コマ撮りの違いがポイント・ライト・ウォーカーの印象に与える効果について」

中村 浩氏（北星学園大学短期大学部）

床歩行、氷上歩行、氷上急ぎ足歩行、雪上歩行4種類のポイント・ライト・ウォーカーについて「1コマ撮り」、「2コマ撮り」、「3コマ撮り」のアニメーションを作成し、それらに対する18の形容詞対による印象評定を比較した。その結果、歩行動作に特徴の少ない「床歩行」と「氷上歩行」については3アニメーション刺激に対する印象評定間に違いが認められたが、特徴的な歩行動作をする「氷上急ぎ足歩行」および「雪上歩行」については、印象評定に大きな差は認められなかった。研究会では、この結果およびその解釈について議論を深めたいと考えています。

5:30-6:00

全体討議

以上のような構成で、研究会が行われた。各発表者は、自作のアニメーションや参考作品を上映しながら説明を加えたので、非常にわかりやすいものとなった。参加者の人数は非常に多く、アニメーションの動きへの関心が強いことが理解でき、アニメーション現場と知覚研究者のコラボは、今後も続ける必要を感じた。

（よこた まさお/映像心理学研究会代表、日本大学文理学部）

本企画の後半、西川智也氏のトークはテキストに起こして facebook ページ等にアップする予定。

3) 2014 年度の活動計画

二ヶ月に一回程度でシンポジウム、上映などを行う。

上映を中心とする大きな企画を年一回程度行う。その際にはシンポジウム、研究発表なども合わせて行いたい。また、海外作家の上映、例えばフィル・ソロモンのフィルム作品の特集上映などを検討中。催しは東京以外の都市の会員と連携して、国内の数カ所で行えるように計画したい。

アナログメディア研究会の活動は facebook ページ でもご覧頂けます。
<https://www.facebook.com/analogmedia?ref=hl>

以上

（おた よう/映像作家、アナログメディア研究会代表）

アニメーション研究会報告

横田 正夫

平成 25 年度の第 2 回目のアニメーション研究会が、平成 26 年 3 月 22 日（土曜日）、日本大学文理学部 3 号館の 3409 教室で開催された。

1 時から 2 時には、足立加勇会員が「キャラクターを成立させる技術と映画の視点」というテーマで発表した。この発表は、現在会員が執筆中の学位論文の一部を構成するもので成り立っているということであった。マンガ、アニメの主要キャラクターは、着せ替え人形化されており、顔の輪郭や目鼻の構造は全て同じであり、それらの個別化は髪の色を変えることで図られるという。そしてこうした着せ替え人形化は、観客が、キャラクターを直接知覚し、その個性を楽しむのではなく、キャラクターは観客の夢を呼び起こす刺激として機能し、観客はキャラクターの背後にリアルなキャラクターを想像するのだと語る。こうした着せ替え人形化の行き着く先は、画面のキャラクターが直接観客に直面するという関係性が生ずるに至る。観客は、キャラクター（を媒介にした想像上のリアルなキャラクター）と見つめ合うことになり、結果的に観客動員型の映画が成立することになると説明する。こうしたキャラクター論は、非常に今日的なものであり、大変興味深い。

2 時 10 分から 3 時 10 分までは、ゲストスピーカーの薄葉彬貞氏により「世界 10 ヶ国におけるアニメ・マンガ消費の実態」が報告された。薄葉氏は最近『世界アニメ・マンガ消費行動レポート』を出版した。今回の報告は、そのレポートを要約したものであった。薄葉氏は、2012 年 10 月から 2013 年 3 月にかけて、アメリカ、スペイン、アラブ首長国連邦等の 10 ヶ国の、合計学生 1800 人に、アニメ・マンガに関する消費行動についてアンケート調査を行い、その分析結果を報告した。その報告の中で印象深いデータは、テレビ放映されたアニメは、放映後 30 分以内に字幕付きで違法サイトにアップロードされるというそのすさまじいばかりの速さであった。しかし、そうした関心の強さにもかかわらず、映像ソフトの購入には至らないという厳しい現実が報告された。お金は使いたくないがアニメは見たい、というのが海外での実態とまとめられた。フロアからどうしても購入を促進できるかとの問いに、薄葉氏は、自身の購買理由を述べ、アニメの技術的なものへの関心から、どうしても手元に置きたいような動きが作り出されているものがあると説明し、そうしたことのわかるアニメファンが増えることが必要と付け加えた。

3 時 20 分から 4 時 20 分までは、ゲストスピーカーの藤原正仁氏により、「アニメーション監督 今敏という生き方と作品における表現の連鎖：文化資源に基づく一考察」が発表された。藤原氏によれば、今敏監督には 17 という数字に対する拘りがあったという。このことは 17 歳がキャリアトランジションの一つであったことを示している、と解釈された。今敏作品は、多層的な解釈が可能のように、多くのものが画面の中に潜在している。それを見つけ出し、読み解いてゆくことで、作品世界の理解が深まることを藤原氏は示唆した。

4 時 30 分から 5 時 30 分には、ゲストスピーカーの原田央男氏が、「脳内世界の歩き方～2014・聖地巡礼再考～」という発表をおこなった。最初の足立会員の発表と関連して、聖地巡礼は、その地を訪ねることが目的ではなく、その場でアニメ世界を空想して、その世界を心の中でさらに展開し楽しむことだと述べる。こうした聖地巡礼は、映画などで、作品に登場した舞台を、ファンが訪ねて回る行為とは基本的に異なると指摘された。

これらの報告の後、全体的討議が行われ、その後会場を移し、懇親会が行われた。

（よこた まさお／アニメーション研究会代表、日本大学文理学部）

映像テキスト分析研究会

中村 秀之

映像テキスト分析研究会は、長谷正人会員（早稲田大学）を代表として、2003 年から 2010 年まで 9 回の研究発表会を開催しました。うち 8 回は発表者 1 名でしたが、平均 3 時間超をかけて刺激的な発表と自身の濃い討論を行ないました。

諸般の事情でしばらくお休みしていましたが、このたび、新たに中村秀之（立教大学）を代表として東部支部の研究会として登録申請し、活動を継続することになりました。運営構成委員は、長谷会員を始め、これまで研究会の中心メンバーだった木村建哉会員（成城大学）と藤井仁子会員（早稲田大学）が務めます。

昨年 12 月の正式承認から間がなかったため、2013 年度内の実質的な活動は見送りましたが、来る 4 月 12 日（土）に、2014 年度第 1 回研究発表会を立教大学池袋キャンパスで開催します。詳細は学会 HP と ML のお知らせでご確認ください。今後は運営メンバーの合議により、会員みなさまに広く研究発表の機会を提供していく所存です。特に若手研究者の方々の積極的な参加を期待しています。発表をご希望の方は中村までご相談ください。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（なかむら ひでゆき／映像テキスト分析研究会代表、
立教大学現代心理学部映像身体学科）

映像理論研究会

木村 建哉

映像理論研究会活動計画

休眠状態だった映像理論研究会ですが、昨年 12 月の理事会で東部支部の研究会としての再登録を認められ、2014 年度より活動を再開します。

早速再開第 1 回の研究会を下記の要領で行います。

第 19 回映像理論研究会

発表者：木下耕介（群馬県立女子大学）

中村秀之（立教大学）

日時：2014 年 5 月 17 日（土）15:00-18:00

場所：成城大学キャンパス（教室未定、小田急線成城学園前駅徒歩 5 分）

論題と教室については追ってメールで通知し、また学会ウェブサイトでご告知します。

なお映像理論研究会の現在の研究会運営構成員は下記の通りです（アイウエオ順）。

木村建哉（成城大学、代表）、斉藤綾子（明治学院大学）、中村秀之（立教大学）、長谷正人（早稲田大学）、藤井仁子（早稲田大学）。

（きむら たつや／映像理論研究会代表、成城大学文芸学部）

すのはらまさひさ

映画監督・春原政久のフィルモグラフィー作成について

田島良一

映画文献資料研究会では、昨年(2013年)の12月7日(土)の午後3時から5時まで日本大学芸術学部E棟204教室に於いて第33回の研究会を開催しました。今回は、轟夕起子の研究者として知られる映画史家・山口博哉氏をお招きし、山口氏がもう一つのライフワークとして10年かけて調査、研究した春原政久監督のフィルモグラフィーについて、その作成の経緯や情報収集の苦心談、春原監督作品の特徴等について発表して頂きました。以下は山口博哉氏による発表のレジュメです。

映画監督・春原政久(すのはら・まさひさ、1906～1997)は1933年にデビューし、1964年の『大日本コソ泥伝』まで32年間に79作品を監督した。日活太秦で第1作『僕らの弟』(フィルム現存)を発表し、日活多摩川、大映東京、東映東京、新日活を活躍の場として、晩年はテレビドラマに移行した。一般には、第1回山中貞雄賞に輝いた『愛の一家』(1941)、反戦映画の力作『風にそよぐ葎』(1951)、東宝サラリーマン映画の原点『三等重役』(1952)あたりが有名だろう。主に小品喜劇を得意としたが、どんなジャンルを引き受けても一定の水準に仕上げる職人気質の持ち主だったようだ。

私は1970年生まれなので、春原監督の孫の世代にあたる。女優・轟夕起子の研究を長年続けており、彼女の伝記を書くことがライフワークだ。映画の専門教育は受けたことがない。自己流で轟夕起子および映画史を勉強してきた。映画に関係した仕事に就いたことはなく、現在も他業種の仕事で生活を支えながら、在野の映画史家として活動中である。自己流とはいえ、映画書を書く程度の映画知識は身につけている。

2004年4月、偶然に春原監督の長女・暁子さんと知り合い、最初は簡単な「聞き書き」を作ろうと思い立ったが、春原監督の経歴を詳しく調べるうちに、日本映画史の重要な監督であることが分かってきた。そして10年かかってその業績をまとめた。「伝記」ではなく「フィルモグラフィ」にしたのは、伝記を書けるほど資料が集まらなかったからである。これまで日本映画史では黙殺状態であった映画人にスポットを当て、初のフィルモグラフィを完成させたことは意義があったと思う。

10年間のうち、ほぼ半分の年月は春原研究に手がつけられなかった。それは、①ライフワークの轟夕起子研究に時間をさいたこと、②金銭的苦境におちいったこと(これは今も最大の悩み)、③私の研究熱の低さ、などが原因である。私はそもそも「春原監督の大ファン」ではなく、「あらゆる困難を克服して本を書く」という熱情はなかった。たまたまご遺族と知り合い、「こんなに日本映画に貢献した方なのだから、業績をまとめたい」と義侠心からられたのが始まりだった。だから100%納得のいく取材・調査をしたとは言えない。業界雑誌「キネマ旬報」や、撮影所雑誌「日活多摩川」(1937～1940年刊)などは一通り調べたが、稀少なファン雑誌である「大日活」や「日活報知」などは閲覧せずじまいだった。自戒を込めて自己採点すると、70点の熱意で書き上げた70点の本である。しかし70点でも書かないよりは書いた方が良かったと思う。実際この10年間に、春原監督の実弟・春原信忠さん、映画美術の巨匠・木村威夫さん、女優・小沢昭一さんといった証言者が亡くなっている。また貴重な証言を寄せて頂いた春原家の皆さん、俳優の片山明

彦さん、『愛の一家』で四男を好演した豊田耕兒さんの証言を書き留めただけでも、今回のフィルモグラフィは価値があると言えるだろう。

フィルモグラフィの完成に漕ぎつけるまでには、いろいろ辛い場面があった。経済的な苦境は言うまでもないが、文字資料をワードに大量入力する作業が大変で、もともと悪かった視力がさらに悪化した。また「月刊・轟夕起子」というフリーペーパーを私は自費発行しているが、こういった「楽しみながら作る映画資料」とは違い、今回は資料的な正確さを至上とするフィルモグラフィであるだけに、各文献の内容の違いを吟味し、どの文献のどの部分が正しく、どの部分が正しくないかを地道に検討し、精度を高めねばならなかった。それは気が遠くなるほど面倒で、胃の痛くなる作業である。また一映画ファンとして、好きな事だけに関心を持っていては、フィルモグラフィを作ることはできない。あまり興味のなかった新劇の歴史や、映画検閲の実態、春原家と関係の深い天理教、出身地の長野県岩村田のなどを、一から勉強した。そして初めて手がけるフィルモグラフィだったので、フィルムアート社の「成瀬己喜男」(1995年刊)や、立風書房の「鈴木清順全映画」(1986年刊)などをお手本とした。

事実に忠実であり、知らないことや調べられなかったことは、もちろん書かなかった。また情報の典拠を明確にするためにも、「本書の、○頁○行目○文字目から、△頁△行目△文字目までは、『……』という資料に基づいた」と即答できるくらいに、きめ細かい注釈をほどこした。他方、100年後の読者、それも映画の知識が豊富でない人が読んでも、一定の理解ができるよう心がけ、学術的に評価されるよりも、一般の映画ファンに取っつきやすい記述にした。

このフィルモグラフィを、単なる「情報の寄せ集め」にしないためにも、「解説」の部分(私の書下ろし)には最も力を入れた。ここが本書の勝負所である。見ていない映画の解説を書くことには、相当神経をすり減らしたが、春原監督の再評価につながる部分なので、一言一句に注意して書いたつもりである。だからと言って、面白くないことを面白いと書いたりしては、かえって春原監督への侮辱になる。だから慎重に冷静に評価した。責任重大のこの執筆作業が一番辛かった。もちろん好きで始めた春原研究であり、やっている間も楽しかったが、それ以上に苦痛が大きかった。完成に10年もかかったのは、この苦痛が原因だ。完成への最後の一押しをして下さったのは、日大芸術学部・映画学科の田島良一先生である。「映画文献資料研究会で春原監督の研究を発表してはどうですか？」と声をかけて頂いたことで、ラストスパートをかけることが出来たのだ。

このようにして完成したのが、「私家版・映画監督・春原政久フィルモグラフィ」(306頁)である。2013年12月4日に完成した。一般書店に並ぶような公刊本を目指したが、スチール写真の著作権が払えないため、やむなく私家版という形にまとめた。春原監督のご遺族をはじめ、ご協力頂いた関係者や、主要な映画関係者や団体に寄贈するつもりである。それ以外の希望者がいらっしゃれば、製作実費のみ頂いて配布したい。

私は春原監督の全79作品中、わずか20本しか見ていないが、10年間の調査・研究を踏まえて、春原監督を次のように評価する。

監督としてのピークは3回あった。1つは1941年の『愛の一家』。この作品の成功は、それ以前の傑作『オリムピック横町』『制服を着た芸妓』(1937)、『奥様御出勤』(1938)等、20本以上にのぼる作品の集成である。2つ目のピークは『三等重役』を監督した1952年前後。不遇をかこった大映を飛び出し、東映映画へ移り、巨匠待遇で監督した『七色の花』(1950)や『泣虫記者』(1952)の秀作群。3つ目は新生日活でSPコメディに腕をふるった1961年頃。この3回目のピークは、「映画史上の名作」とは言えぬまでも、軽妙で理屈抜きに楽しめる小品喜劇の数々であり、戦前の小品喜劇『雛妓と坊ちゃん』(1935)や『人情ぐるま』(1940)等と軌を一にする。戦後日活では実に30本以上を監督している春原監督だが、これまで『ああ軍艦旗』シリーズや、『おやエ』シリーズぐらいしか話題にのぼらなかった。しかし再評価すべき作品群がまだまだ存在する。

春原監督の演出の特徴は、淡々として抑制がきいた描写、そこから醸し出されるそこはかないおかしみ、ちよっぴり加味された皮肉、等にある。各エピソードが並列した、スケッチ風のおっとりした喜劇を撮らせたなら抜群に巧かったようだ。その成功例は『愛の一家』『三等重役』『泣虫記者』等だが、『ママの日記』(1954)のような不成功例もある。他方、作品全体を貫く強いテーマ性への肉薄に弱いのも春原監督の特徴で、それが『制服の街』(1939)や『魅せられたる魂』(1953)の評価の低さにつながっていると思われる。春原監督は日本映画俳優学校(水口徹陽・創設)の出身で、演技の勉強も習得済みだ。だから俳優の演技を重視した。初期の日活多摩川時代は、撮影所の専属俳優との仕事ばかりだったが、『海の虎』(1945)で文学座の名女優・杉村春子を起用したのがきっかけだったのだろうが、戦後は新劇俳優を重用した。『七色の花』の主役には、木暮実千代あたりが興行的には無難なのに、あえて杉村春子を使ったところに、春原監督の狙いの的確さが現われている。1957年の『ああ軍艦旗』を境に、新劇人の出演はほとんどなくなり、春原作品はドタバタ喜劇に方向転換する。「せっかく巨匠格になったのに、つまらない添物映画専門に墮落した」と評論家から決めつけられ、「キネマ旬報」批評欄にも取り上げられなくなった。

しかし映画は時代を超えて鑑賞され、楽しめるものなのだ。封切当時に見えなかった良さが、かえって後年になって評価されることもある。そういった映画や映画人の仕事を、正当に再評価することが、映画史家の無上の喜びである。近々、完成したフィルモグラフィを持って、多磨霊園の春原監督のお墓を訪ねたい。そして墓前で、監督の好きだった日本酒を傾けながら、ともに映画への愛を語り合いたい。

以上の内容の発表が取材写真や豊富な配布資料の説明などを交えて約90分程あり、その後、出席者からの質疑応答が30分にわたり活発に交わされました。研究会の終了後は山口氏を囲んで恒例の懇親会を開き、参加者同士が熱心に情報交換を行うなど、昨年最後にふさわしい盛り上がった研究会になりました。

以上

(たじまりょういち／映画文献資料研究会代表、日本大学芸術学部)

フォーラム

■第5回「日本学術振興会 育志賞」受賞候補者推薦要項(平成26年度)

1. 趣旨

日本学術振興会(以下「本会」という)は、天皇陛下の御即位20年に当たり、社会的に厳しい経済環境の中で、勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として、平成21年に陛下から御下賜金を賜りました。

このような陛下のお気持ちを受けて、本会では、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することを目的として、平成22年度に「日本学術振興会 育志賞」を創設しました。

2. 対象分野

人文学、社会科学及び自然科学にわたる全分野

3. 授賞

授賞数は16名程度とし、受賞者には、賞状、賞牌及び副賞として学業奨励金110万円を贈呈します。

4. 対象者

平成26年4月1日現在34歳未満であり、次の①又は②に該当する者であって、平成26年5月1日において我が国の大学院博士後期課程(医学、歯学、薬学又は獣医学を履修する4年制の博士課程を含む)に在学している下記のいずれかの条件を満たす者

① 大学院における学業成績が優秀であり、豊かな人間性を備え、意欲的かつ主体的に勉学及び研究活動に取り組んでいる大学院生であって、当該大学長から推薦された者

② ①に相当する大学院生であるとして所属する学会長から推薦された者

なお、推薦に当たっては、論文等の業績のみにとらわれず、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な者を多様な観点から推薦願います。

また、海外からの留学生で大学院博士後期課程に在学する者についても、推薦することができます。

5. 推薦権者

1) 我が国の大学の長(大学長推薦)

推薦数: 人文学、理工系、生物系各1名、その他に分野を問わず1名の計4名まで

2) 我が国の学術団体の長(学会長推薦)

推薦数: 1名まで

※学術団体については、日本学術会議協力学術研究団体となっている学術団体に限ります。

また、自薦・個人推薦は受けません。

6. 推薦手続

1) 提出書類

① 「受賞候補者推薦名簿」原本1部(様式1)

② 「推薦書」原本1部、写し2部(様式2)

③ 「推薦理由書A、B」*注1 それぞれ原本1部、写し2部(様式3)

④ 「研究の概要等」原本1部、写し2部(様式4)

注1: ③は、推薦者以外に、研究指導者及び候補者の研究を理解している研究者の2名から、それぞれ作成いただくものです。

2) 応募方法

(i) 候補者毎に、②~④を片面印刷し番号順に1部ずつ重ねて、左上をホチキスでとめてください。

(ii) ①を表紙とし、そのリスト順に(i)をセットして提出してください。

7. 受付期間

平成26年6月11日(水)~6月13日(金)(必着)

8. 選考方法

推薦のあった候補者について、日本学術振興会に設置する選考委員会において、書類選考により面接選考対象者を決定し、面接選考を経て受賞者を決定します。

9. 選考基準

学業成績が優秀で、豊かな人間性を備え、意欲的かつ主体的に勉学

及び研究活動に取り組んでおり、次の①又は②を満たすこと。なお、選考に当たっては、機関長からの「推薦理由」(様式2-①)及び推薦理由書A・B(様式3-①・②)を重視します。

① 我が国の学術研究の将来を担う研究者となりうる卓越した能力を有しており、将来学界等への貢献が期待されること

② 将来、更なる研究の発展が見込まれ、卓越した研究者に成長していく可能性を有していること

※ 上記①、②に該当する者の例

○ 発想・着想、課題設定などにおいて、創造性・独創性が高い研究に主体的に取り組んでいる者

○ 当該学問領域や学際領域における重要な基盤となる研究に主体的に取り組んでいる者

○ 研究活動に関連する、ユニークな活動に主体的に取り組んでいる者

○ きびしい研究環境の下でも創意工夫を凝らして、主体的に研究を進めている者

○ 短期的には論文等の成果が出にくい研究に対して、忍耐強く取り組んでいる者

10. 選考結果の通知

選考結果は、平成27年1月下旬頃(予定)推薦者に通知します。

11. 授賞式

平成27年3月頃に行う予定です。詳細については、選考結果とともに受賞者に通知します。

なお、受賞者の授賞式に出席する旅費は本会(日本学術振興会)が負担します。

12. 受賞後の取扱い

受賞者は、希望により翌年度から特別研究員等に採用することとします。その場合、研究奨励金等が支給されます。

特別研究員等への採用を希望する者は、翌年度の4月1日の在学年次、学位の取得状況等に応じた採用区分の特別研究員又は外国人特別研究員に所定の手続きを経て採用することとなります。既に特別研究員として採用されている受賞者についても、希望により前記と同様の扱いを受けることが可能です。詳細については、受賞者に対して別途お知らせします。

なお、特別研究員または外国人特別研究員への採用に当たっては、原則として他のフェローシップ、研究費の助成等を受給することはできません。また、定められた規則等を遵守して頂きます。

13. その他

1) 推薦書等は、所定の様式を使用してください。なお、推薦書等は本会(日本学術振興会)のホームページ(<http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html>)よりダウンロードすることができます。

2) 推薦書等の提出後、その記載事項を変更または補充することはできません。

3) 提出された推薦書等は返却しません。

4) 選考結果に対する問い合わせには応じかねます。

5) 受賞者の氏名、所属等は公表されるのであらかじめ承知願います。

6) 受賞者には、我が国の学術の振興、本会の事業の充実等のため、協力を依頼することがありますので、あらかじめ承知願います。

7) 推薦書類に含まれる個人情報については、「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」及び本会の「個人情報保護規程」に基づき厳重に管理し、本事業や関連する本会の業務遂行のために利用します。

14. 推薦書類の提出先及び問い合わせ先

推薦書類は下記へ、配達記録の残る方法での送付によって提出してください。なお、配達会社のホームページ等で到着の確認をして下さい。

〒102-0083 東京都千代田区麹町5-3-1

独立行政法人 日本学術振興会

人材育成事業部 研究者養成課「日本学術振興会 育志賞」担当

TEL 03-3263-0912 FAX 03-3222-1986

ホームページアドレス

<http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html>

以上

編集後記

総務委員会

■ 2、3日留守にして帰ってみますと、勤め先のキャンパスの桜がいきなり満開になっていて驚きました。会員の皆様にとって、新しい年度が実り多いものになりますようお祈りしております。また、この号の執筆してくださった皆様をはじめ、ご協力いただいた方々に心から感謝申し上げます。つぎは沖縄の大会でお目にかかりましょう。(末永)

information

学会組織活動報告

研究企画委員会

相内 啓司

研究企画委員会 / 報告事項、計画

〈報告事項〉

① 2013年度の「研究会登録申請」の件数(12)

研究会名:「ショートフィルム研究会」(中部)、「関西支部夏期ゼミナール」(関西)、「映像表現研究会・西部会」(関西)、「ヴィデオアート研究会」(東部)、「アナログメディア研究会」(東部)、「映画文献資料研究会」(東部)、「映像心理学研究会」(東部)、「アニメーション研究会」(東部)、「クロスメディア研究会」(東部)、「映像テキスト分析研究会」(東部)、「映像理論研究会」(東部)、「映像表現研究会・東部会」(東部)

② 2013年度の「研究会活動助成申請」の件数(5)と採択件数(5)、研究会名:「ショートフィルム研究会」(中部)、「関西支部夏期ゼミナール」(関西)、「映像表現研究会・関西支部」(関西)、「ヴィデオアート研究会」(東部)、「アナログメディア研究会」(東部)

活動状況の報告、決算報告等の提出とりまとめ中。(3月30日現在)

〈計画事項〉

① 新規の「研究会登録申請」(2014年度)の公募:引き続き継続する。
*研究会の申請時期は春期(4月末)、秋期(9月末)の年2回

◎「研究会登録申請書」について

新規に発足を希望する研究会、および2013年度中に各支部への登録申請が済んでいない既存の研究会の主宰者は学会ホームページに掲載の記入票(研究会登録申請書.xls)に、必要事項を記入のうえMailにて映像学会事務局・支部宛(登録を希望する支部)に登録申請のこと。

*研究活動の休止の理由などについて十分な説得力が得られない場合には研究企画委員会・理事会の審議を経て本学会が公認する研究会としての承認が得られない場合があります。

なお、その対象となった研究会は、2年間同一の会員が主宰する同名の研究会として申請することができなくなります(以上、2013年7月6日の理事会の承認事項)。

*なお、「研究会登録申請書」の記入内容について不明な点は映像学会事務局に問い合わせのこと。(電子メールの場合の送信先アドレス: jasias@nihon-u.ac.jp)

②「研究会活動助成申請」(2014年度)の公募:引き続き継続する。
(応募期間:2013年2月1日~3月31日)

予算額A: ¥150,000(2件程度) 予算額B: ¥80,000(3件程度)
(総額 ¥500,000~540,000程度)

*とくに研究会活動助成金を受けた研究会は会員に対して、その研究成果、活動運営費の使途・決算書を公表する義務があります。学会報への掲載に合わせて、研究成果については大会での公表が望まれます。

③「研究会活動助成申請」(2014年度)の採択:次期研究企画委員会の主催する審査委員会に委嘱する。

●審査結果の通知:2014年5月中旬

④研究企画委員会の開催:4回程度(2014年度)、検討内容については次期委員会にゆだねる。

以上

(あいうち けいじ/研究企画委員長、京都精華大学芸術学部)